OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	古典における動詞「かく」の用法 : 抽象事を表す語との結びつきから
Author(s)	大谷, 伊都子
Citation	語文. 1985, 46, p. 1-13
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68735
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

古典における動詞「かく」の用法

――抽象事を表す語との結びつきから――

大谷伊都子

一

動詞「かける」は、日本語における基本的な動詞であると同時に、典型的な多義動詞である。普通、「AはBにCをかける」という文型をとり、「を」格・「に」格にさまざまな語をとることによって、多様な意味をもつ。（Aは「人間活動の主体」[1]であることがほとんどなので、本稿ではとりあげない）基本的な意味は、「物体Cを、静止している物体Bに向かって移動・接触させ、Bによってささえて固定させる」というように表現できる。B・Cはともに「具体物」[2]である。

ハンガーに洋服をかける。
つり皮に手をかける。

右のような文は、この基本的意味があてはまる「かける」である。ところが、ここでCが「抽象事」[3]を表す語をとると、Bは、「具体物」の中でも「人間活動の主体」であることが多くなり、「主体が、Bに、Cという働きかけをし影響を及ぼす」という意味になる。たとえば、

私は彼に声をかける。
私は彼女に誘いをかける。[4]

といった用法がそうである。この用法は、「かける」が、「具体物」と「具体物」との物理的関係を表す基本的意味から、少し抽象化の進んだ段階であり、歴史的にも古くから見られるものである。本稿では、「かける」のこの意味をとりあげ、歴史的にどういう過程を経て現在に至っているかを、古典作品を材料に調べてみたい。その場合、「を」格にとる「抽象事」を、Ⅰ言語活動　Ⅱ精神活動　Ⅲ直接行動　Ⅳ加害活動　の四つに分類し、それに従って述べていくことにする。

二

Ⅰ　言語活動

「に」格に対し、音声によって何らかの働きかけをする。「に」格には、その働きかけを受ける対象（たいていは「人間活動の主体」）がくるが、文脈上自明な場合は省略されることも多い。

(1) 言・言葉・～言など

①されど、さやうの戯れ言も、かけ給はず、いと苦しげに見え給へば、(源氏五　229)

②「…、なのらせ給へ」と詞をかければ、(平家下　79)

③あやまちすな心しておりよと言葉をかけ侍しを(徒然　77)

④十郎ふしながら、かけたることばぞ、無慙なる(曽我　360)

⑤イヤ、これへ似合わしい者が参る、急いで言葉を掛きょう(狂言上　餅酒　78)

⑥かつは樽屋に言葉をかけ(西鶴上　好色五人女　249)

⑦若い衆、御苦労と詞をかけて乗越すの(浮世　298)

⑧仇吉は今障子越に何とか言葉をかけたが、おらァろくに返事もしはしねへのに…(春色　181)

⑨酒屋なら「ごくろうさん、えらいなァ」とねぎらいの言葉をかけてくれる。(鳳仙花　中上健次)

平安時代[5]から現代に至るまで、ずっと使われている。現代語と同様、働きかけの内容を「～と」で表す場合もある。(例②③⑦)

(2) 声

⑩人のつぼねつぼねより、こえかけて参る女房などは、ひとりもなし(たまきはる　日国)

⑪Coyeuo caguru(声を掛くる)(日葡)

⑫所〳〵のはたごやよりこゑかけてお泊りかへ〳〵とよぶ(黄表紙道中粋語録　322)

⑬雲介どもは気もつかず、鬮を争ふ最中へ、ワアット声かけ五六人、手でに棒を追取て、(春色　73)

⑭koe wo ―― (和英語林　三版)

⑮私が人垣に声をかけた時、(死化粧　渡辺淳一)

(3) 謎

⑯母の心を安めるため請取ってくれるかと、謎をかけて、渡したを(近松上　冥途の飛脚　174)

⑰エヽもどかしい徳兵衛殿、石に謎かけるやうに口でいうて聞く奴か(近松上　女殺油地獄　410)

⑱其は正しく後妻の事に就いて母親が謎をかけたので(多情多恨　尾崎紅葉　日国)

(2)「声をかく」(3)「謎をかく」はやや慣用句的な表現である。どちらも、出現は中世末から近世とかなり下る。

その他に、現代では使われない表現がいくつかある。

⑲ここに失ひたるやうに、かごとかくる人なむ侍るを(源氏五　418)

⑳草枕ひと夜ばかりのまろねにて露のかごとをかけんとや思ふ(狭衣　390)

㉑君とわが中かはらじと、千秋の松に契りをはるかにかけ松の浦の亀に久しく結ばれける。(御伽　鉢かづき　67)

㉒自ら思はぬ花の根引に逢ひ。かけし誓も嘘となり(近松上　冥途の飛脚　171)

⑲⑳「かごとをかく」は、相手に対して恨み言をいうという意味である。「かごと」という語自体は近世にも用いられているが、「かごとをかく」という表現は平安期の作品にしか見られなかった。実際

はもっとおそくまで使われていた可能性もあるが、現在、この語がほとんど使われなくなっていることは確かである。㉑㉒はそれぞれ一つずつしか用例がなく、固定した表現として当時使われていたのかどうかよくわからない。

「かく」は言語活動を意味する名詞と結びついて、全体でその行動を表す動詞のような働きをする。しかし、それ以前にというか、そのもとに、「かく」が、単独で、口に出して何かをいう、あることがらについて言及するという意味をもつ用法があった。例えば、次のようなものである。

㉓見るたびに心惑はすかざしかな名をだに今はかけじと思ふに（狭衣 308）

㉔「ふと見しり給ひにけり」とおぼせど、ほゝ笑みて、なほ、あるをば、よしともあしとも、かけ給はず（源氏二 429）

㉕「いらへさせたてまつらん」とてかの御ことをかけ給へば、顔は隠し給へる御袖を、すこし引きなほして（源氏四 462）

現代語の「かける」には単独では言語活動動詞としての意味はないので、それと結びつく名詞に言語活動を表す語をとって、初めて全体で言語活動を表す意味になる。ところが、古くは「かく」が単独で現代語の「話す」とか「言う」といった言語活動動詞と同等に扱われていた。「を」格には、言語活動の内容を表すことがらがきた。ただ「言語活動を表す語＋かく」が「に」格をとり、言語活動を及ぼす相手を必要とするのに比べ、この表現では、むしろ口に出していうこと自体に意味の中心があるように思われる。この用法は鎌倉期になると姿を消してしまう。そして、かわりに、言語活動を意味する名詞と結びついて、句[6]としてそのような意味をもたらすようになって現在に至っている。時代が下るにつれて、表現が分節的になっているといえよう。

Ⅱ　精神活動

「を」格に、人間の感情や心理などを意味する語をとる。Ⅲの直接行動と意味的に厳密に区別することはできない。

(1)　こころ

㉖ともすれば、西の山本にも心をかけ給て、世とともに、あくがれ給へるを聞く〳〵（狭衣 371）

㉗「そのあたり」とばかりに心をかけて、晝などもおはします（夜の 210）

㉘相如、年来、文君ニ心ヲ係タル間、カク会バタレ喜ブ心无限テクシ（今昔十巻 313）

㉙人目には何ともみえざりけれども、内々は先に心をかけたりければ、梶原は佐々木に一段ばかりぞすゝんだる（平家下 169）

㉚うゑ木の倒るる事、かならずかたぶくかたにあり。心を西方にかけんに、なんぞ心ざしをとげざらん（宇治 178）

㉛頭燃はらふごとくと見えて候へば、あひかまへ〳〵、佛道に御心をかけ、浄土へまいらんとおぼしめすべきなり（曽我 419）

㉜甲斐なき命生きて、いままた忝くも大政大臣にこころを懸(け)たりなどと言はれん事こそ悲しけれ（義経 61）

㉝かるがゆへになにたる事をたゞすにも、なんぢのちゑをたのまず、われに心をかくべき事也。（こん 356）

㉞中居の玉はかねてより、茂兵衛に心をかけ、命も捨てんと思込

む。（近松上　大経師昔暦　226）

(2) 思い

㉟而ル間、高祖、此ノ事ヲ聞テ老人ノ相ヲ憑テ、心ノ内ニ国王ト可成ト思ヒヲ係ケリ（今昔十巻　273）

㊱常ニハ出家ノ思有リト云ヘドモ忽ニ妻子ヲ難弁キニ依テ、思ヒヲ懸ケ乍ラ、自然ラ過ケリ（今昔十五巻　407）

㊲わが子に人の思ひをかけじとすれば、貞女の法に背く（御伽猿源氏草紙　170）

㊳心ざしもやさしく、恋の只中見し人おもひ掛ざるはなし（西鶴上　好色五人女　312）

(1)「こころをかく」(2)「思ひをかく」はよく似た意味で使われている。使用頻度は「こころをかく」がはるかに高い。「～にこころをかく」で、「に」格にこころを働きかける対象となるものをとる。それは、信仰の対象（例㉖㉚㉛）、好きな異性（例㉘㉞）、あるいは、主体が手に入れたりやっつけたりするべき対象（例㉙㉜）などさまざまである。どちらの表現も、現在まったく使われないということはないが、あまり一般的な表現ではない。[17]

「かく」には、また、働きかける対象だけをとって、その対象についていつも思いを寄せているという意味をもつ用法があった。

㊴山越しの風を時じみ寝る夜おらず家なる妹をかけて偲ひつ（万葉　6）

㊵この御思ひのほどは、中〳〵、さやうなるすぢにも、かけ給はず（源氏一　348）

この用法も鎌倉期にはなくなってしまう。現在ならば、「こころに」「こころを」などとともに使われるところであろう。

(3) あわれ

㊶とがめ聞えさせ給はむ人目をも、いまは、心やすく思しなりて、かひなきあはれをだに、絶えずかけさせ給へ（源氏四　17）

㊷こゝにも、いまだにつゆばかりうちゆるび、あはれをかけ給ふ御気色もなく（夜の　342）

㊸前の世かけて、ふかき契りは、心をそへていそぎたまふめれば、なげのあはれをだにかけざらむものゆへ（松浦　91）

㊹かくて明しくらせ給ふ程に、賤き賤男・賤妻に到まで、外にて哀はかけまいらせけれ共（保元　178）

㊺何事もかはりはてぬる浮世なれば、をのづからあはれをかけ奉るべき草のたよりさへかれはてて、（平家下　426）

㊻倹約をもととして、親に孝をつくし、家来にあはれみをかけ、そろばんをつねにはなさず、（黄表　心学早染艸　204）

㊼いくら貧しいからといって、他人にあわれみをかけてもらうのはいやだ。

(4) なさけ

㊽対の君・少将など、いかばかりの岩木をつくりてか、なさけをかけざらん（夜の　175）

㊾抑池殿のとゞまり給ふ事をいかにといふに、兵衛佐つねは頼盛に情をかけて、（平家下　109）

㊿げに〳〵重忠のたまふごとく、平家の一門、頼朝に情をかけ、

たすけをきて（曽我　154）

㊶御局がたにも、萬寿は器用の者なりとて、御なさけをぞかけ給ふ。（御伽　唐糸さうし　135）

㊷野心を挿みたる人にておはすれば、人ごとに情をかけ、侍までも目をかけられし間、（義経　144）

㊸此うへは是非におよばず、あの長左衛門殿になさけをかけ、あんな女に鼻あかせん。（西鶴上　好色五人女　258）

㊹ただ、私に情をかけたいつもりなら、処刑までに二三日間の日限を与えて下さい。（走れメロス　太宰治　日国）

（12ページ表1参照）

「あはれをかく」「なさけをかく」は、ともによく似た二つの意味をもっている。それは対象に愛情をかけるという意味と、かわいそうだ、なんとかしてやりたいと思う気持ちを抱く、つまり、現代語の「あわれみをかける」や「同情をかける」に近い意味である。愛情といってもその質にはいろいろあるだろうが、これらのことばで表される愛情は、やはり、根底に「あわれみ」や「同情」があり、それから発している愛情といえるだろう。というより、むしろ、人に愛情を感じるというのは、本来、いわゆる今の「あわれみ」や「なさけ」と同じものをさしたのかもしれない。

『源氏物語』『狭衣物語』『夜の寝覚』では、ほとんど「あはれ」が使われ、異性に対する情愛を意味する場合が多い。しかし、その他に、目下の者、弱い者に対する愛情などもある。

鎌倉期になると、「あはれ」にかわって「なさけ」が多用されるようになる。愛情の他に、軍記物では、敵に対して同情心をかけるという意味でもよく用いられた。

今日では、「あわれ（み）をかける」「なさけをかける」は、愛情をかけるという意味には使われず、普通は、哀憐・憐憫・同情などをかけるという意味に限定されている。そして、愛情をかけるという意味は「思いをかける」などで表現される。

(5)　ふびん

㊺年久しくふびんをかけし若衆に、中村八十郎といへるに、はじめより命を捨て浅からず念友せしに、（西鶴上　好色五人女　305）

㊻又もなき歎見し人、ふびんをかけざるはなし（西鶴上　好色五人女　233）

「あはれをかく」「なさけをかく」と同様、「ふびんをかく」も、相手に愛情を感じるという意味と、きのどくだと思うという意味の両方に使われる。発生も近世に下るし、現在は使われない。

(6)　たのみ

㊼頭の君、なほこの月のうちにはたのみをかけて、責む（蜻蛉　233）

㊽中ごろ、思ひたゞよはれしことは、かく、はかなき夢に、頼みをかけて、心たかく物し給ふなりけり（源氏三　289）

㊾こなたのつは物も、かねてその心ざしをしりて、よるひるたのみをかけ、まちのぞむ人なれば（松浦　55）

㊿我レ、本ヨリ、馮ッ係ケル人ノ願フ事ヲ、一テレン不叶ズト云ッ事无ク聞ケ云ッ誓ヒ有リ（今昔十巻　329）

(61)少将はなさけふかき人なれば、よき様に申事もあらんずらむと馮をかけ、（平家上　216）

(62)しかるときんば、はつるたからをたづねもとめ、それにたのみ

をかくる事、みもなき事也（こん　200）

㊸正しかれと心中に頼みをかけし辻占の、鴉籠舁が詞のはづれ惣七が胸に應へ。（近松上　博多小女郎浪枕　350）

(7)　のぞみ

㊹太政大臣以下の公卿殿上人、すべて世に人とかぞへられ、官加階にのぞみをかけ、（平家上　217）

㊺天下第一の美人にておはしければ、雲の上人われも〳〵と望みをかけ給ひけれども、更に用ゐ給はず（義経　100）

㊻この人々は、まなこに見えぬをはりなき事にしつかいののぞみをかけたまふ也（こん　246）

「たのみをかく」は、相手あるいは何か他のものを頼る、あてにする、あるいは期待する意。「のぞみをかく」は、こうありたい、こうしたいとのぞみ、願う意である。ともに現在も用いられている用法である。

(8)　願

㊼其とき善人たちはげんぜにをひてなんがんをかけし者どもにたいせられ、たけき心をもちたまふべし（こん　255）

㊽疱瘡した時日親様へ願かけ。代々の念佛捨て（近松上　女殺油地獄　410）

㊾大木戸の石がきに、せきだの金のはさんであるのは、なんだの。あれは何ンのか願をかけるのさ（黄表　総離　363）

㊿私はいゝなづけのお方の為に、神様へ願をかけ（春色　70）

神や仏に自分の望むことがかなうようにお願いするという意で、近世頃から使われだし、現在に至る。

(71)われらが力にかなふまじ、仏神に祈をかけ、神の力を頼むべし（御伽　酒呑童子　364）

(72)清水の観世音へ祈誓をかけてござれば（狂言上　居杭　399）

「願をかく」とよく似たい方に、右のように、「祈をかく」がある。中世には使われたが、現在では使われない。この二つは言語活動、あるいは直接行動に入れることもできよう。

その他に、数は多くなかったが、精神活動に入ると思われるものがいくつかあった。いずれも、現在は一般的でない表現である。

(73)然に、はひらうにやの帝王へかけさせ給ふ不審啓かせ給はぬ事なし（伊曽　385）

(74)たちかへるなごりもありの浦なれば神もめぐみをかくるしら波（平家上　275）

(75)いや打殺しても大事ない姉の夫に執心かけ、江戸まで文を遣ったるを（近松上　堀川波鼓　51）

(76)たった一間半の門柱に念かけ、母に手向ひ父を踏み行先偽り騙事（近松上　女殺油地獄　410）

「不審をかく」は、現在の「疑いをかける」に通じる表現であろう。

「精神活動を表す語＋かく」の表現も古くから存在し、歴史的にもそれほど大きな変化は見られない。「あはれ」「なさけ」「たのみ」などは意味の上で多少の変化はあるが、平安時代から今日までずっと使われてきた表現である。また、現在、この種の表現の数が過去

に比べてそれほど増えているわけではない。

Ⅲ　直接行動

「に」格対象に対し、直接的に行動をしかける表現である。

(1)　世話

㊼文字一つ覚えぬくせにあて字かく、をしゆる人はあたまかく、せわをかくとぞ見へにける（浄瑠璃　釈迦如来誕生会　日国）

㊽一門中がせはかくも、皆治兵衛よかれ、兄弟孫共かはいさ（浄瑠璃　心中天の網島　日国）

「世話をかく」は、よく気を配って人のめんどうを見るという意味で、現在の「世話を焼く」と同じ意味と考えてよい。近世になって使われ始め、現代は、この意味では使われていない。後に述べる加害活動の意味に変化して使われている。

(2)　なじみ

㊾新町通に夕霧といふ太夫に馴染をかけ。源之介を儲けたは定めて皆も聞きつらん（近松上　夕霧阿波鳴渡　202）

㊿あの人はわがみの乳母馴染をかけていとしがり。此母も同前に。大人になっても乳母は見捨てぬものぢゃぞや（近松上　夕霧阿波鳴渡　207）

「なじみをかく」は、ある遊女に特に親しんで通うという意味で、近世の遊里の隆盛と結びついて生じたこの時期に特有の表現かもしれない。ただ、これも、もともとは遊女に愛情をかけるというような精神活動という表現から転じた可能性もある。

直接行動を表す語と「かく」が結びついた表現で目についたのは、以上あげた二つである。もっと数多く作品にあたれば見つかるかもしれない。しかし、いずれにしろ近世になって使われだしたようである。現代語にみられる「誘いをかける」「攻撃をかける」「追い込みをかける」「みがきをかける」といった表現は、近世の作品においてもまだ見られない。さらに発生が下ると思われる。

Ⅳ　加害活動

(1)　やっかい

(81)さま〴〵のおもひ事、とても叶はぬに無用の佛神を祈り、やっかいを掛ける（西鶴上　好色五人女　234）

(2)　苦労

(82)三日過さず大坂中へ申訳はして見せうと、後に知らるゝ詞の端いづれも御苦労かけました（近松上　曽根崎心中　27）

(83)御苦労かくること是ぞ黄泉の障となる（近松上　五十年忌歌念佛　156）

(3)　大事

(84)年ごろ、にくまれずして養ぜられたる曽我殿に、大事かけてうらみうけ給ふな（曽我　288）

(85)われ故人に大事をかけじとて、（義経　188）

(4)　難儀

㊱汝らにこれを返しとうはあれども、これを返したならば、また往来の者に難義をかくるであろう（狂言上　二人大名　225）

㊲今では世間広うなり養子の母に難儀をかけ、人に損かけ苦労をかけ（近松上　冥途の飛脚　185）

㊳どんなことでかおまはんに難儀をかけるよふなことになつちゃァわりいから（春色　58）

(5)　損

㊴此の銀もすはといへば着替賣りても損かけぬ（近松上　曽根崎心中　23）

㊵措いてくれ気遣すな五十両や百両。友達に損かける忠兵衛ではござらぬァ（近松上　冥途の飛脚　174）

(6)　恥辱

㊶はやくくるしむ事なく、ちじょくをかくることばにもどうてんする事あるべからず（こん　351）

(7)　なげき

㊷明日は在所へ聞へなばいかばかりかは歎をかけん親たちへも兄弟へもこれから此の世の暇乞（近松上　曽根崎心中　35）

㊸此の世の妹に歎をかけ来世にござる母親の。屍に苦患がかかるはと（近松上　堀川波鼓　53）

(8)　苦

㊹お苦しみをかけまし身に余ったお家の御恩（近松上　丹波與作待夜の小室節　101）

㊺エゝ無念な男の身ならば是式に親達に苦はかけまい（近松上　大経師昔暦　224）

(9)　憂き目

㊻大坂の濱に立っても此方様一人は養うて。男に憂目かけまいもの（近松上　冥途の飛脚　176）

㊼同じ傾城請ける身が我は其方のおふくろに。憂目をかける口惜しい（近松上　冥途の飛脚　183）

ここに述べた表現を、ⅡやⅢに含めず、加害活動として別項をたてたのは、語の意味のかかわり方がⅡやⅢとは異なるからである。

私は彼に攻撃をかけた。

私は彼に苦労をかけた。

右の二文で「を」格にきている「攻撃」「苦労」などの名詞は用言的な意味をもつから、「する」をつけると動詞になる。前者は「攻撃する」主体は「私」である。ところが後者では「苦労する」主体は、「私」ではなく「彼」なのであり、「私」は、「彼」に苦労させる原因となっている。このように、加害活動の表現では、「かく」がこれまでとは違った性格をもつようになっている。[8] これは、ここに属する「を」格がとる名詞に共通した意味、つまり、他に働きかけるという性格がなく、自ら被る苦しみを表すというような意味と関連があると思われる。この用法は、発生の時期が中世末から近世とかなり下る。この時期に、この類の表現がいくつもあらわれるが、現在まで残っているのは「やっかい」「苦労」で、その他の表現(3)〜

(9)は使われていない。現在使われている同類の表現に、「面倒をかける」「迷惑をかける」「心配をかける」「世話をかける」などがあるが、これらはさらに時代が下って生まれたものだろう。7ページで述べたように、「世話をかく」が、近世においてはまだ、主体が世話をするという直接行動の意味で使われていたことからも、加害活動の意味での用法が新しいことがうかがわれる。ここで使われる名詞は、他の類と異なり、漢語が多いのが特徴である。

三

「具体物」と「具体物」との物理的関係を表す表現、たとえば、

私はさおにシーツをかけた。
私はさおに本をかけた。

という二文で、前者の方が自然に感じられるのは、後者が、現実世界において、前者ほどよくおこる状況ではないからである。つまり、これは言語の問題ではなく、現実世界と言語とのかかわりの問題である。

次の例はどうだろう。

私は彼にあわれみをかけた。
私は彼に愛をかけた。

この二文では、前者は一般に用いられる表現だが、後者はあまりなじまない表現である。しかし、状況としては現実にどちらもありうることだから、後者がなじまない表現というのは、言語内における問題になってくるのである。「抽象事」を「を」格にとった場合に、問題になるのはこの点である。つまり、ある動詞と結びつく名詞はかなり限定されているが、その限定にそれなりの必然性があるのかということである。そこで、そのような「抽象事」を表す語を「を」格にとる「かける」の用法が、歴史的にどのような変遷を経て、現在に至っているのかを調べようというのが本稿の主な目的である。

さて、今まで調べてきた範囲内で、「抽象事」を表す語＋「かく」の消長を分類すると次のようになる。

1句が出現しだした時から、意味的にもほとんど変化がなく、現在まで使われているもの
2表現としては現在まで残っているが、意味的に変化しているもの。この変化は名詞の方におこっていることが多い。
3過去に表現として存在したが、現在は使われないもの
　イ名詞自体が使われなくなった
　ロ名詞単独では現存する
（4近代以降出現したもの）

このうち2と3のイは句全体の問題ではなく、名詞の方の問題になるのでここではふれない。

歴史的に見た場合、言語活動と精神活動を「を」格にとる「かく」は、中古から基本的にそれほど大きな語の出入りはなく、昔の用法をそのままうけついで現在に至っているといってよい。また、発生が古いものは、結びつく名詞の方も、和語が中心である。言語活動では「ことば」、精神活動では「こころ」が一番早い時期に使われ始めているが、この二つがそれぞれ、言語活動を表す語、精神活動を表す語の中で原点に位置する最も基本的な語だという点で、納得できる気がする。

一方、中世末から近世にかけて、新たな表現法が数多く現れるが、

その中には、その後現在まで生き残るものと、語としてはずっと残っても、句としては一時的に現れてまたすぐ消えてしまうものがある。たまたま使われたある表現が、人々の間に普及し定着するか、あるいは、新奇な表現としてその場だけで使われたり特定の個人だけに使われて終わってしまうかは、偶然によるところが大きいと思われる。ただ、中世末から近世にかけては、人々が、言語使用において柔軟かつ貪欲にさまざまな表現を試み、それまでにはなかった新しい表現が生まれた時期だといえよう。

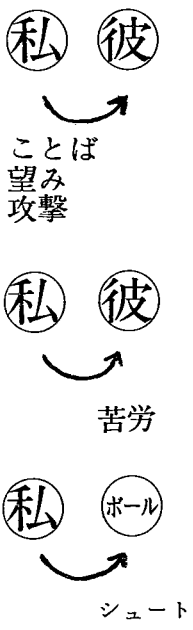
Ⅳ加害活動は、この時期に生まれた新しい用法であり、「かく」の歴史上注目すべき用法であろう。「抽象事」を表す語＋「かく」で表される句は、考えてみると、だいたい、人間が人間に対して働きかける活動を意味している。人間の活動は、言葉によるか、行動によるか、心によるかである。したがって、「抽象事」がこの三つに分類できるのは当然といえば当然である。ところが、Ⅳの加害活動だけは、他とは別の観点から分類されている。8ページでもふれたが、もう一度繰り返すと

私は彼にことばをかけた。
私は彼に望みをかけた。
私は彼に攻撃をかけた。

この三つでは、「ことばを発し」たり、「攻撃し」たり、「望ん」だりするのは「私」である。ところが、

私は彼に苦労をかけた。

では、「苦労する」のは「私」ではなく、「彼」になっている。図で示すと、



右のようになる。この加害活動と同じ視点に立ったい方として、たとえば、

私はボールにシュートをかけた。

などがある。これにしても、「シュートする」のは「私」ではなく、「ボール」なのである。「かく」は、史的にはⅠ・Ⅱの用法が基本であったと思われる。Ⅳの用法はそれからずれた新しい用法であり、それは歴史的にもはっきり証明されている。

最後に、「直接行動を表す語＋かく」であるが、これは最も発生が遅れる。近世に見られたいくつかの表現は、現代にまで生き残っていないので、現在使われているこの種の表現は、すべて近代になって生まれたと考えられる。

ただ、ここで注意しなければならないのは複合動詞の存在である。(9) つまり、かつては、「を」格を介さず、動詞の連用形＋「かく」という複合動詞を使って表現していた可能性も考えられる。現在の「直接行動を表す語＋かける」に使われている名詞が、古典において「かく」と結びつき複合動詞として使われている例として、「おどしかく」「さそひかく」がある。しかし、この二つの語は、現在も「を」格を介した表現と併用されている。過去においては複合動詞、現在はそれにかわって「を」格を介した句表現という単純な図式はなりたたない。ということは、直接行動を表す語と「かける」が「を」

格を介して結びついた句は、複合動詞とはあまり関係なく、別の理由から存在したということになる。

たとえば、「誘いをかける」は、同じ構成要素から成り立つ複合動詞「誘いかける」や、「かける」のない動詞だけの表現「誘う」より、意味的に強い感じがする。さらに、指向を表すだけでなく、「かける」のもう一つの意味、始動の意味までが加味されるようである。また、今日では、句表現になった場合、名詞化した動詞本来の意味で使われるより、慣用句として変化した意味で使われることの方が多いようである。

先ほど、「かける」と結びつく名詞の必然性云々ということを述べた。言語活動と精神活動を「を」格にとる「かける」については、その発生時における必然性を問われると結局わからないのだが、用法は歴史的に古いものだということがわかった。それだけに、今後新しい表現が生まれる可能性も少ないように思われる。

一方、直接行動を表す語を「を」格にとる「かける」は、「に」格対象に何らかの働きかけをするという意味の面では、言語活動や精神活動と連続しているが、現在あるいくつかの表現は、近代になって生まれたものばかりである。また、加害活動を「を」格にとる「かける」は意味的にも特色のある表現で、やはり発生は中世末から近世である。これらの表現は歴史が浅いだけに、これからどのような変容を遂げるだろうか。外来語と「かける」が結びついた句表現の存在などからも、その一端を垣間見ることができる。

さて、本稿では、動詞「かける」を例として、抽象的なことがらを表す語との結びつきにおける歴史的な変遷をたどってきた。この「かける」についてみられる傾向は、他の動詞にもほぼあてはまるだろうと思われる。ある語の正確な発生期、及びその時期の使用状態を知るのは極めて困難であるが、動詞が、「具体物」→言語や精神に関する「抽象事」→精神的判断や動作など直接行動に関する「抽象事」というように、結びつく名詞の範囲を広げていくことは予想されうることである。

また、ある動詞がもつ基本的意味からずれていない意味が適用できる用法は、歴史的にも古くからあり、そうでない用法ほど発生がおくれるということがいえそうである。

「かける」は、主体の対象への働きかけを意味し、その働きかけのあり方が「を」格にくる語で表されている。したがって、「に」格対象のあり方を「を」格にとる「苦労をかける」といったように、基本的意味からずれた表現は発生の年代が下るのである。

ところが、たとえば「つける」という動詞に関してみると、これは、主体が「に」格対象に「を」格対象を接触・付着させるという基本的意味をもつ。主体が「に」格対象に何らかの働きかけをもつことは「かける」と同じだが、その働きかけた結果の状態の独立性が「かける」よりも強い。そのため、「つける」が「を」格に抽象的なことがらを表す語をとると、それは、ほとんど、「に」格対象が所有するところの属性・あり方を表すようになる。

私は彼に元気をつけた。

私は服のえりぐりにカーブをつけた。

というような文で、「元気」「カーブ」はそれぞれ、「彼」「えりぐり」のあり方を表している。この用法は、基本的意味からそれほどずれていないので、古くから存在する。

太政大臣の后かねの姫君ならはしたまふなる教へは、よろづの

事に通はしなだらめて、かどかどしきゆゑもつけじ、たどたどしくおぼめく事もあらじと（源氏三　24）

ゑい〳〵聲をしのびにして、馬にちからをつけておとす、餘りのいぶせさに、目をふさいでぞおとしける（平家下　211）

これらの「つく」は、「に」格対象に、「を」格にくる語で表されるある属性をもたせるといった使役的な意味をもっているのである。つまり、同じ用法でも「かける」の場合より発生がはやいわけである。

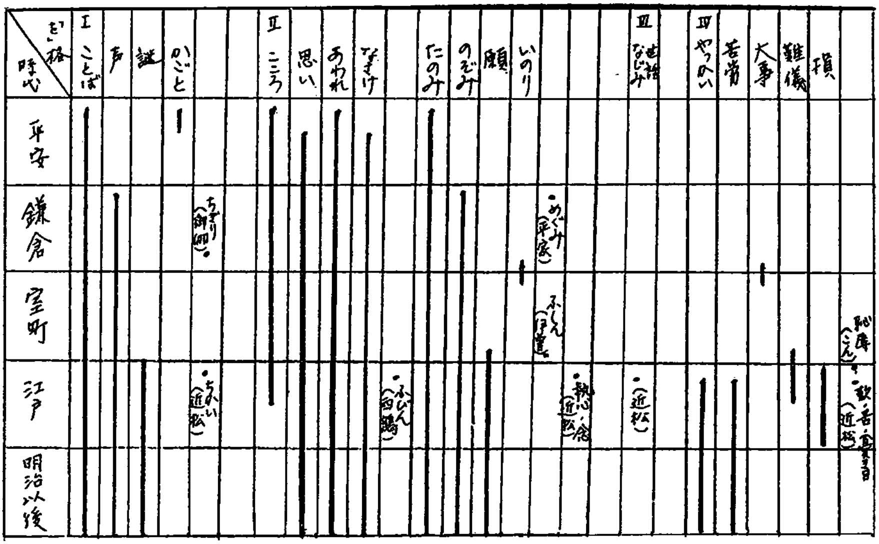
　このように、動詞における多義化の歴史的変遷を、その動詞と結びつく名詞の意味から考える場合、全般に共通する流れのようなものもあるが、一方で、個々の動詞の意味が異なる以上、十把一からげにして論じることができない個別性をもっていることがわかる。だが、その個別性の中にも、それがそうあるべき必然性があるのではないだろうか。

　下に調査結果を表にした。正確なものではないが、およその流れはつかめると思う。

表1

	なさけをかく	あはれをかく
源氏	0	6
狭衣	0	7
夜の	1	3
松浦	1	1
保元	1	1
平家	6	2
曽我	8	1
御伽	3	0
義経	2	0
西鶴(上)	1	0
黄表	0	1(あはれみ)
浮世	1	0

表2



注

(1) 『分類語彙表』(国立国語研究所　一九八一)の「1.体の類」に属する分類による。

(2) ここでいう「具体物」は、『分類語彙表』における「1.体の類」の中の、「生産物および用具」「人間活動の主体」、さらに「自然物および自然現象」の一部をさす。

(3) ここでいう「抽象事」は、『分類語彙表』における「1.体の類」の中の、「人間活動—精神および行為」「抽象関係」をさす。

(4) 詳細は『日本語学11月号』(一九八四　明治書院)の拙稿「語の多義性について—動詞『かける』の意味分析—」に譲る。

(5) 本稿では、『万葉集』は歌集であるという特殊性のため調査の対象からはずした。しかし、この表現は『万葉集』に既に見られる。

。妹と言はば無礼し恐ししかすがに懸けまくほしき言にあるかも(2915)

(6) 本稿で「句」とは、名詞が格助詞を介して動詞と結びつき、ひとまとまりの表現となったものをさす。

(7) ここで、「こころ」と「気」のことについて少しふれる。「こころをかく」とよく似た表現に「こころにかく」がある。「こころをかく」は「こころ」が動的で「に」格対象に向かっていく、「こころにかく」は「こころ」に「を」格対象が入ってくる、というようなニュアンスの違いはあるが、この二つの表現は意味的にもよく似ている。

ところで、この「こころにかく」は平安期から使われているが、中世末頃から、これと平行して「気にかく」が使われ始める。一般に、「気」はこの頃から他の連語句にも多く使われるようになってくるのだが、「かく」に関しても同様だった。そして、意味的にもしだいに役割分担がおこり、「こころにかく」は、どちらかというとプラス評価の対象に対して、「気にかく」はマイナス評価の対象に対して使われるようになった。ところが、「こころをかく」に対しては、「気をかく」が現れないのである。それどころか「こころをかく」までもがしだいに使われなくなる。これはおそらく、「こころをかく」の意味が、「こころにかく」や「気にかく」に吸収されてしまったのではないだろうか。このような現象をみると、句の消長には偶然の作用がかなり大きいような気がする。

(8) 村木新次郎氏は、「日本語の機能動詞表現をめぐって」(『国立国語研究所報告65　研究報告集2』一九八〇)の中で、機能動詞にはヴォイス的な意味をもたらす用法があり、「かける」は使役表現を作る場合があると指摘しておられる。

(9) 複合動詞との関連は、直接行動だけでなく、言語活動や精神活動においても同様である。しかし、数的に多いのは、やはり、動作を表す動詞の連用形＋「かける」の複合動詞であり、この動作を表す動詞の連用形が、直接行動を表す語と一致するのである。

(10) 「指向」「始動」という語は、姫野昌子「複合動詞『〜かかる』と『〜かける』」(『日本語学校論集6号』一九七八)による。

本稿の用例は次の本によった。

万葉集・源氏物語・狭衣物語・夜の寝覚・今昔物語集・保元物語・平家物語・宇治拾遺物語・徒然草・増鏡・曽我物語・御伽草子・義経記・狂言集上・仮名草子集(伊曽保物語)・近松浄瑠璃集上・西鶴集上・黄表紙洒落本集・春色梅児誉美(以上は岩波古典文学大系)　松浦宮物語(角川文庫)　吉利支丹文学集上(こんてむつすむん地のみ。日本古典全書)浮世床(小学館日本古典文学全集)

その他『日本国語大辞典』(小学館)『古語大辞典』(角川)『時代別国語大辞典上代』(三省堂)など各種辞典を参考にした。